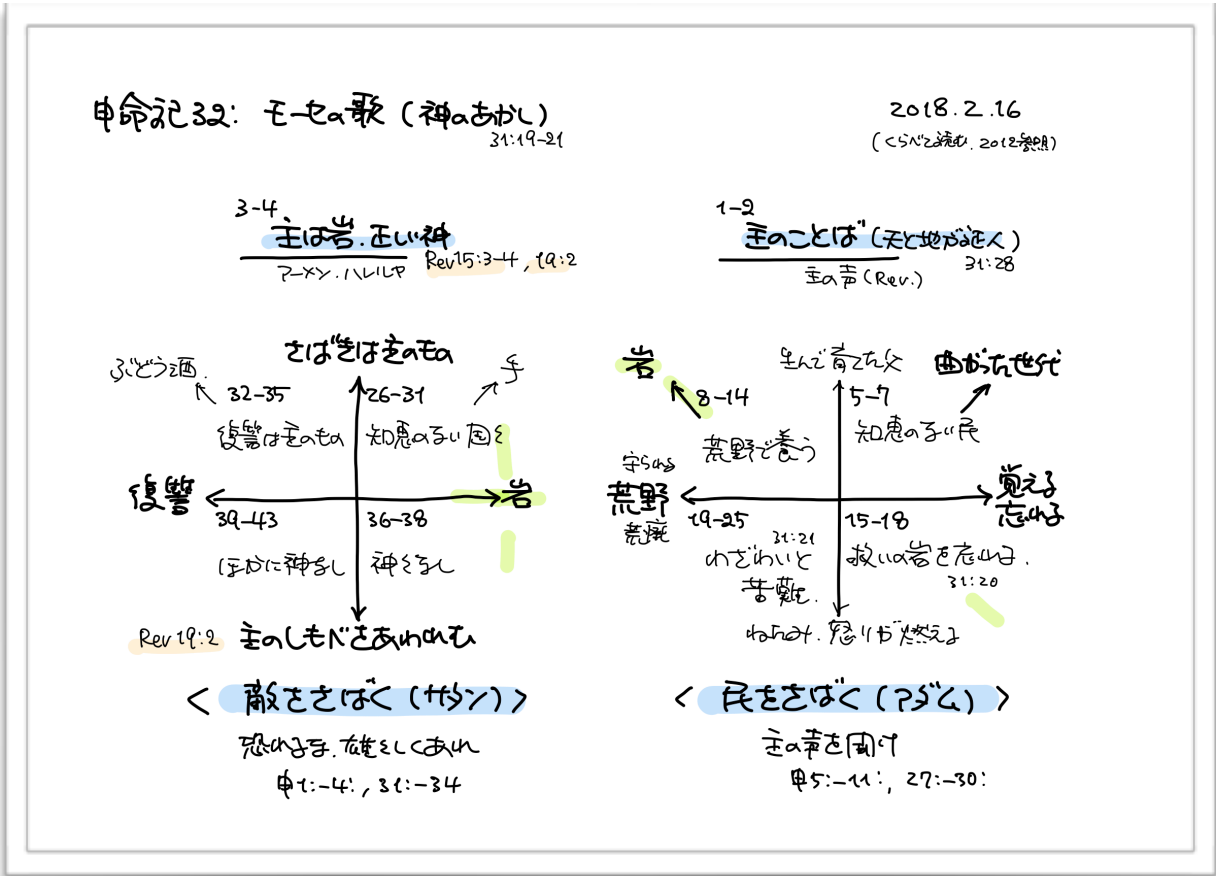




申命記32章

モーセの歌



申命記32章モーセの歌を見直しました。32章は申命記の最後にあるところですが、この約束の地に入る最後のところです。ヨシュアに働きを相続して、死ぬ前にこの歌を相続として与えるというところです。

これは、ソロモンの時にダビデが歌を歌った18篇が引用されていますけれど、そのこと、そして祝福の歌。最後の相続の歌、証しの歌というところで、全体を見ているので確かめました。

これは、何のためなのかということに神様は、ここ31章19節に書いてくださっています。「この歌をわたしの証しとして、証拠として覚えさせる」ということです。このあと、約束の地に入るのですが、契約を破ります。破った時にこの歌が証拠となって、その通りにさばきが来ますよということを教える厳しいですが、恵みの歌ということなのでしょうね。その歌が32章に記録されているということです。

いろいろな箇所を見て考えなければいけませんけれど、導入という感じでしょうか。32章1節から4節までのところに…これは天と地を証人に立てるといふふうで31章28節で言います。それで、「天よ。地よ。」というところから(32章が)始まります。「これは、主のことばです。私は主は岩、その御名をほめたたえなさい。主の道は正しい。真実の神で偽りがなく、正しい方、直ぐな方である。」というところから始まるのですが、この3節と4節は、黙示録の15章で、神のしもべモーセの歌と子羊の歌を歌ったと言われているところで、直接ではないですが引用されているという箇所です。

それで、証しをしている内容が残念な内容になっていますね。(32:8～)「よこしまで曲がった世代。主の子らではない。(…となってしまうのですよね。)愚かで知恵のない民よ。」というところから始まります。その前半は、民をさばく。民をさばくのですけれど、敵を用いて民をさばく。後半は、その敵をさばくという民をさばくことと、敵をさばくこと。アダムをさばくことと、サタンをさばくことのような感じですね。

そして「主の声を聞け。恐れるな、雄々しくあれ」という時には、敵に対してということになるかと思います。「主の声を聞け」というのは、申命記の大きな段落のくくりの中で、5章からのところ、27章からのところが「主の声を聞け」。「恐れるな、雄々しくあれ」のほうは、1章からと31章からのところということですので、申命記全体の約束がこの歌の中に表されているということだと思います。

それで、32章からの分析なのですが、ここに書いてあるクロスしている分析のもの自体は、2012年の時の分析のところから書き直していることになっています。ですので、「くらべて読む聖書」の律法のところ、3つあります。32章というページと、32章と創世記の3章、4章のところの並行を見たものの記録。それと、さきほどもありましたモーセの歌が…黙示録でモーセの歌と言われますけれど、モーセの歌の32章の成就として黙示録のところが出てきますので、この箇所を比べるというページがあります。

それで、こういうところを比べると何がわかるのかということ、32章3節と4節のところだけを見て、これが、「アーメン、ハレルヤ」ですと。こちらは神様のことばに対して、民の応答だというように分析をしていますけれど、何故ここが、「アーメン、ハレルヤなの？」という疑問があるかと思うのですが、黙示録15章に、神のしもべモーセの歌と子羊の歌という箇所がありますけれど、ここで、「正しく真実な神です。御名をほめたたえます。」という「正しいさばきが明らかにされたからです。」これが、この歌を歌っている理由みたいなものですね。「正しいさばきが明らかにされたからです。」それと(黙示録)19章2節、「天に大群衆の大きい声を聞きました。ハレルヤ、救い、栄光、力は、われらの神のもの。神のさばきは真実で正しいからである。神は不品行によって血を汚した大淫婦をさばき、ご自分のしもべたちの血の報復を彼女にされたからである。」…「アーメン。ハレルヤ。(19:4)」というこの、神のしもべたちの血の報いをするという(申命記)32章の最後のところですね。「主がご自分のしもべの血のかたきをを打ち、ご自分の仇に復讐をなし、ご自分の民の地の贖いをした」というところで、32章のモーセの歌が終わっているわけですから、これはまさに、復讐がなされたという意味で「アーメン。ハレルヤ。」という段落だと。この3,4節は。「アーメン。ハレルヤ。」を長く言っている段落だと。主は王であって、その王が御名の栄光をあらわすこのさばきを成した。正しいさばきが明らかになったということですので、ここは、「アーメン。ハレルヤ。」なのだよということは、そういう箇所から言えることになります。主のことば、主の声がたくさん出てくる黙示録と一緒に見るということは、ふさわしいことだと思います。

32章自体の紙も、そこ(くらべて読む申命記32章)に載っています。各段落の並行を見たところ。民の罪、敵のさばきということ。荒野で食べさせた岩。怒りに燃える岩。敵を用いて民をさばく岩。敵をさばいて民を救う岩。主は岩であるという詩篇の最初のもので、岩について覚えていて、詩篇18篇、第2サムエル22章のところを見たりしなければいけないということです。

32章をどういうところから見ていけばいいのかというアプローチも(くらべて読む申命記)32章のところ、動画もあって説明しています。岩の詩篇、律法の中での位置付け。

33章とも一緒に見ないといけないということもありますし、他の詩篇18, 31, 90, 95, 105, 106篇というところも一緒に見ないといけないということで、この分析のアプローチについて出ているところもありますので、このあたりを見て、「知恵がない、知恵がない」と言っている神様の知恵ですね、正しいさばきの知恵ですから。神様の知恵。愚かな民に神様の知恵を教える歌になっています。